中産連の月刊マネジメント専門誌

プログレス

CHU-SAN-REN MANAGEMENT MAGAZINE

PROGRESS

2024/3

第875号　令和6年3月1日（毎月1回）発行

一般社団法人 中部産業連盟
中産連

特集

1. 中小企業が取り組む人的資本経営の在り方
2. 外国人雇用が企業文化に変革をもたらす

1月1日より新社屋にて業務開始（加藤精工株式会社／詳細は次頁）

75th ANNIVERSARY
Value Partner for Your Vision
～選ばれる存在に～

革新の創造力

自社の守ってきた大切なものを信じて前へ進む
～1年間の取材を振り返って～

中産連「革新の創造力」取材班

今年度、取材した企業は４社。いずれも、何かに挑戦している企業である。その挑戦によって企業に新たな価値を生み出し、あるいは企業の価値そのものが異なるステージへと進んだという結果をもたらしていた。ただ、取材を通じて感じたのは、それだけではない何かだった。それは、ものをつくるうえでの「誠実さ」のようなものだ。それぞれのそれぞれが持つ基準に忠実でありたいという誠実さを推進力にして、企業は前進しているように感じた。

真面目さとチャレンジ精神

静岡県浜松市に本社のある中村建設㈱は土木・建築分野を中心とした事業を行っている。社員は約２２０名で、前期の売上げは１９０億円ほど、前年比７％増加している。

土木部門では、道路、橋梁、下水、造成、マリン工事の社会資本（インフラ）整備に加えて、土壌改良やリサイクルの環境事業や災害復旧、災害対策への対応、また、道路や河川のインフラの維持とメンテナンスに力を入れている。

一方、建築分野では、社屋や工場、各種施設を先進的省エネルギー建物へと変身させる新しい取り組みを行っているほか、太陽光発電、地熱発電などの再生可能エネルギーへの取り組みにも力を入れており、同社が社会基盤であるインフラの整備や建築物の建設によって、豊かな生活を実現するという目標に向かって真摯に取り組んでいることが伝わってくる。

BELS認証を取得した本社ビル

中村仁志社長は「地域の魅力が増して、そこに人が集まり、それが巡り巡って私たちの仕事へとつながっていく」と話す。土地を開発したり、建物を建築したりといった従来の土木建築業から脱却して、地域環境を創造する事業を進める同社は、創業当時から続く社訓である「誠心誠意」「果敢断行」を今も心に刻んで、前に進もうとしている。

違う分野への活用が違う価値を生む

大物金属部品の高精度な切削加工を行っている京都市南区の老舗メーカーである川並鉄工㈱は、従業員６名、年間売上１億円前後と小さな企業だが、展示会に出品したあるものが、その後の同社の歩みを変革させることになった。そのあるものとは、CADとマシニングセンターを駆使してアルミのブロックから削りだしたブルゾン。革の質感までも精巧に表現されたそのブルゾンは、国内だけでなく、海外までにも知れ渡ることになり、それをきっかけに、「刻鈑（こくはん）」と名付けた新たな技法を開発した。

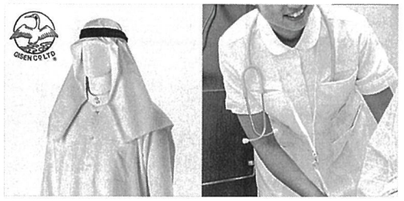
第４回切削加工ドリームコンテスト金賞受賞作「JACKET」

「刻鈑」は、CAD／CAMを駆使して、厚さ1ミリの大型のアルミ板に1／1000ミリ単位で階調を付けて刻み、写真で撮影した風景などを表現する技法。アルミの屏風、襖絵、障壁画といえるもので、２０１３年に製造特許も取得した。

このような加工が可能になったのは、コンピュータによるデータ作成と、実際の加工技術の両方の知識を持ち、そのふたつをうまくバランスさせながら融合することができたからだ。川並社長は、将来「刻鈑」を事業の柱にしたいと話す。また、「われわれの加工技術は違う分野へ活用すると、まったく違う価値が生まれます」と話し、新たな挑戦にも意欲を見せている。

技術の継承と新たな開発

繊維産業の中でも染色に特化した岐阜県瑞穂市の岐セン㈱は、さまざまな機能を持たせた染色を開発・提案することで、企業として何度も不死鳥のようによみがえってきた。その要因は、自社の強みである染色加工技術を見つめ直し、「保持するべき技術の継承ができたことが大きかった」と後藤勝則社長は話す。


中東向け男性用トーブと抗ウイルス加工を施した医療従事者用ユニフォーム

同社が得意としているのは、複合繊維の染色加工で、それは、たとえば綿とナイロン、麻とポリエステル、ウールとアクリルなど異なる繊維を同色に染めたり、逆に異色に染め分けたり、性質の違いを利用して模様を創り出したりする技術である。一方、染色した生地に、魅力的な風合いや機能性を付与することを仕上加工と呼び、用途に合わせて加工技術をいくつか組み合わせることで、テキスタイルの可能性は無限に広がる。

後藤社長は、「優れた染色加工技術は、いまや商品の付加価値を高めるために不可欠な要素技術。日々進化する素材一つひとつに対応する技術の開発と生産体制の革新は、新たな価値観を創り出す契機になる」と強調している。

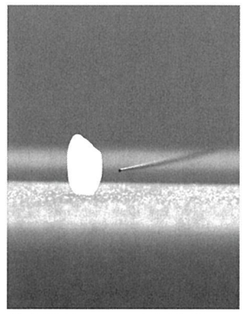
同社の社員は約２２０名、年間の売上は35億円前後で、今期は大きく売り上げを伸ばす見込みのようだ。同社の挑戦は、日本の繊維産業における染色加工の可能性をさらに広げていくことになるだろう。

ニッチに生きるという覚悟

京都市南区の老舗メーカー・二九精密機械工業㈱は、仏具の加工から始まり、その後、大手家電メーカーなどの部品製造を経て、現在はチタンなどの難削材の精密・微細加工を得意とする最先端の技術者集団へと変貌している。現在、社員は約２８０名、昨年の売上は40億円。

同社が製造しているものは、いずれも高い精度が求められるニッチな分野の製品で、血管内治療に使うカテーテルやガイドワイヤーなどの医療事業分野、血球分析装置の分注ノズルなどの分析事業分野、半導体製造装置の部品をつくる半導体分野という3本柱で占められている。平均の生産ロット数は30個で、1個から10個というものも多いというから、まさに取引先ごとに課題を解決するものづくりを行う多品種少量生産体制といっていい。

同社にとって、ひとつの転換期となったのは、βチタンという素材との出会いだった。取引先の血球計測装置に搭載されていたステンレス製の血液分注用ニードルを、βチタンに置き換えることに挑戦し、それを見事に実現した。


外径0.5mm、内径0.3mmのβチタンパイプ

同社は設備投資と人材育成に、常に資金と力を注ぎ、ニッチな分野こそ生きる道であるという覚悟がある。二九直晃社長は「素材メーカーとして、パソコンに搭載されているインテルのような存在を目指していきたい」と語る。

新たな挑戦が未来を拓く

今年度取材した4社を振り返ってみると、その挑戦する姿には心を突き動かされる何かがある。その何かを「誠実さ」という言葉でくくってしまっていいのかどうかわからないが、自らの企業が守ってきたものを信じて大切にしながらも、新しい挑戦に立ち向かう姿は、話を聞く私たちの姿勢をも正す力がある。今年もまた、多くの中小企業の挑戦する姿を伝えていきたいと思う。